

校長室から

# ひがしなら通心

(H31年度)

茨木市立東奈良小学校 川上 隆 No. 4

平成31年4月15日(月)発行

## 「真心(まごころ)」の力

<「心」は目には見えないけれど・・・>

私たちの言葉や行動は、目には見えない心から生まれてきます。わがままな心を持っていれば、その言動は自分勝手なものになるでしょう。思いやりを満ちた「まごころ」を持っていれば、その言動は自然と相手の気持ちに配慮したものになるでしょう。それらの心は言葉となり、行動となって、周囲の人たちに伝わっていきます。「まごころ」に関するこんな歴史上の逸話があります。

今年、日本との国交樹立百周年を迎えたポーランド。地図で見ると、日本から遠く離れた東ヨーロッパに位置している伝統的な親日国です。なぜポーランドは親日国なのでしょう。そこには、以下のような理由があったのです。

18世紀後半、ポーランドは隣接する3つの大国に分割されて国土を失いました。その後は独立運動を繰り返しては酷寒の流刑地シベリアに送られるという、苦難の時代が百年以上続きます。ようやく独立を果たしたのは、第一次世界大戦が終わった1918年。ところが混乱が続くシベリアでは、祖国へ帰ろうにも帰れない多くのポーランド人が、寒さと飢えと伝染病に苦しんでいたのです。せめて親を失った子供だけでも救いたい—そんなポーランドの人たちの声に唯一応えた国が大正時代の日本です。日本の外務省は窮状を知ると直ちに救援に乗り出します。日本赤十字社やシベリア出兵中の兵士達が協力して孤児を救い出し、船で次々と日本へ送り出したのです。最終的には750人以上の孤児が日本に保護されています。孤児達はやせ衰え、重い伝染病にかかった子供も多くいました。それが日本で手厚い看護を受けるうちに元気を取り戻していきます。中には腸チフスの子供を付きっきりで看病した末に自身も感染し、子供の回復を見届けて亡くなった看護師もいました。一般の人々からの慰問や寄付も後を絶たなかったと言います。健康を取り戻し祖国へ帰ることになった子供たちは、日本人との別れを惜しんで泣き、船が出航する際は「君が代」を歌って感謝の気持ちを表しました。

<われわれは恩を忘れない>

大正11(1922)年、孤児達の帰国を受けて、その救済のために奔走したポーランド人組織の副会長から、つぎのような感謝の手紙が送られています。

～ 日本人はわがポーランドとはまったく縁故の遠い異人種である。日本は

わがポーランドとは全く異なる地球の反対側に存在する国である。しかしわが不運なるポーランドの児童にかくも深く同情を寄せ、心から憐憫(れんびん)の情を表してくれた以上、われわれポーランド人は肝に銘じてその恩を忘れることはない。われわれの児童たちをしばしば見舞いに来てくれた裕福な日本人の子供が、孤児達の服装の惨めなのを見て、自分の着ていた最もきれいな衣服を脱いで与えようとしたり、髪に結ったりボン、クシ、飾り帯、さては指輪までもとってポーランドの子供たちに与えようとした。こんなことは一度や二度ではない。ポーランド国民もまた高尚な国民であるがゆえに、われわれはいつまでも恩を忘れない国民であることを日本人に告げたい。……ここに、ポーランド国民は日本に対し、最も深い尊敬、最も深い感恩、最も温かき友情、愛情を持っていることをお伝えしたい～

このポーランドの人々の思いは、時を超えて現代の日本に返ってくるのです。平成7(1995)年の阪神・淡路大震災発生後、日本の子供たち数十人が夏休みにポーランドを訪れました。被災した子供を励ましたいという、ポーランドの人たちの招待によるものです。子供たちが日本へ帰国する前には、かつてシベリアから救出された元孤児の方々が高齡を押して駆けつけ、バラの花を一輪ずつ手渡しして激励したそうです。

<心に刻まれた「まごころ」>

平成14(2002)年7月、天皇皇后両陛下がポーランドをご訪問になりました。このとき、すでに90歳前後になっていた元孤児たちのうち3人の方が、首都ワルシャワの日本大使館公邸で両陛下と面会を果たしています。一人の女性は皇后陛下の手を握ったまま、離そうとしなかったそうです。その胸には幼い日の思い出がありました。日本で治療を受けていた頃、施設を訪れたある女性に抱き上げられ、元気になるようにと優しく励ましてもらったのだといいます。その女性こそ、大正天皇の皇后である貞明(ていめい)皇后でした。それから80年もの間、抱き続けた感謝の気持ちを、今ようやく対面がかなった皇后陛下に伝えられたのでした。

シベリアから救出された元孤児をはじめ、ポーランドの人たちの心に刻まれたもの。それは貞明皇后の、そして多くの名もなき日本の先人たちの、慈愛に満ちた「まごころ」でした。大正時代の先人たちは、見返りを期待してポーランドの孤児に手を差し伸べたわけではないでしょう。しかしその善意は、結果として平成の日本人に返ってきたのです。ポーランドでは、東日本大震災で被災した子供たちに対しても、励ましの気持ちを込めて招待してくれています。「まごころ」は時代も国境も越えて人々の心に染みとおろし、時に人を突き動かすほどの力を発揮するということを、これらの逸話は物語っています。「ニューモラル(No.596 平成31年4月号)より」

